

1 プラトンは「魅惑の歌」を歌っているか？

プラトンは「魅惑の歌」を歌っているか？

小島 和男

はじめに

「言葉は矢」とはよく言ったもので、書かれて流布されたテキストがその書き手の意図通りに受け取られるかどうかは全く分からない。ハイネですら生きていた当時、そのことを嘆いているのだから、約二五〇〇年も前に死んだプラトンの作品からプラトンの意図を読み取ることなど、不可能に近いだろう。プラトンが生き返ったら、ハイネ以上に嘆くかもしれない。

しかし、ロングフェローが樫の木に矢が折れてささっているのを見るように、矢は、言葉は、その形を変えはするかもしれないが、どこかに残るし、影響は与える。

『パイドン』と言えはその中で語られているのは「魂不死の証明」であるが、プラトンの矢はどのように残っていると見えるのだろうか。

## 1 魂不死の証明の意義について

『パイドン』という作品の大部分を占めているのが、七〇Cから一〇七Dにかけての、所謂「魂不死の証明」である。その証明は一般に四つに区分される。

- ① 生と死の循環構造による証明
- ② 想起説による証明
- ③ 魂と「それ自体」の親近性による証明
- ④ 仮説の方法による証明

①と②が補いあっているのは、よく語られている(二)。①の証明は、そもそも、生きているものから死んでいるものが、死んでいるものから生きているものが生まれるということを言っているだけで、七〇Bのケベスの要求するような、「人間が死んでも何らかの力と知を持つている」ことは、それだけでは言えてはいない。②の証明があつてはじめて、「何らかの力と知」を持った魂が不死だという事が言えてくるのである。しかし、②の証明だけでは、死後の魂の存在は言えてこない。それ故、別々に見るとしても、この二つは切り離して考える事は出来ないだろう(三)。さらにまた、ソクラテス自身、想起説だけでは生前の魂の存在証明であつて死後の魂の存在証明がなされていないと言うケベスに対して、七七C〜Dで、「生と死の循環構造による証明」と結び付けば証明されたことになるかと語っているのである。

しかし、ここで注目したいのは、この①と②の証明には、③と④の証明とは異なつたある共通点があるというこ

### 3 プラトンは「魅惑の歌」を歌っているか？

とである。

まず、①についてはこう言われている。

「実にここで私たちが思い出すのは、とある昔からの言説だ、ここからあの世へ到った魂たちは実に再びここへ戻り、死者たちから生ずるのだ、というね（『パイドン』七〇C五〜八）」

言説（ロゴス）として語られているが、「昔からの」と言われているように、言い伝えの類であると言える。

次に②の想起説については、『メノン』に言及することになる。『パイドン』では、「あなた（ソクラテス）がいつもよく話していたあの言説（ロゴス）（『パイドン』七二E一〜二）」という登場の仕方をしているからである。そこで、『メノン』を見てみると、当該箇所は八一A以下となるであろうが、そこでソクラテスは想起説を持ち出す際に、「神々に関することどもについて知恵のある男の人たちや女の人たちから聞いた（『メノン』八一A五〜六）」言説として語られている。

つまり、これらの共通点は、言い伝えや聖職者たちからの伝聞であるという点である。そうなると所謂「ミュートス」ではないのかと考えたくなるむきもあるが、しかし、両者とも『パイドン』においての登場時には、「ロゴス」と表現されている。

つぎの③の証明をソクラテスはどのようにして語ることになったのか。その前後を見てみよう。七七C〜Dで、①と②を結び付ける話をソクラテスはする。結び付けることで魂は死後も存在することになるといふようにである。「それにもかかわらず」とプラトンはソクラテスに続けさせる。

「それにもかかわらず他方で、きみとシミアスはさらにもっとその論を徹底的に調べたいと思っており、そして子供たちのように恐れているように私には思われるのだよ……『パイドン』七七D五〜八」

証明はされた「にもかかわらず」、ケベスとシミアスの中には、まるで子供のような恐怖があるのだとソクラテスと言う。それを払拭する為には、

「では、とソクラテスはおっしゃいました、毎日その子供に魅惑の歌を歌ってあげなくてはね、その歌で魅惑してしまうまで（『パイドン』七七E九〜一〇）」

というように、繰り返し「魅惑の歌」を聴かなければならないのである。その後で、ソクラテスがすぐれた歌い手とされていることからしても、その「魅惑の歌」とは、そのときされていたような魂不死の証明のことなのは明らかである。魂不死の証明は、死におびえる内なる子供から恐怖を取り除く為に、何度も何度も語られなければならないものなのである。

しかし本来証明とは、一度ある命題を証明したならば、それだけで、その命題の正しさを確保することが出来るような性質を持つはずのものである。そうであるにもかかわらず、プラトンはソクラテスに、そのような「魅惑の歌」としての証明を、何度も繰り返す必要のあるものとして語らせている。つまり、『パイドン』においてなされた魂不死の四つの証明は、証明という言葉で我々が通常想起するような、一度限りで命題に保証を与えるものとしての証明ではなく、むしろそれが繰り返さなければならないという点に力点が置かれているもののように思われる。

そのように考えると、③の証明は、①と②の証明が仮に完璧なものにみえたとしても必要であったということが理解されよう。証明に不備があるならば、その不備を無くすよう努めるのは、ある意味当然なことかもしれない。だが、ここで証明が繰り返される理由は、その不備によるものではない。特に②は、七七Aでシミアスも言っているように、少なくとも彼らにとっては完璧なものであったはずだからである。このことから、魂の存在証明が不完全だから、その不完全さが理由で四回もしくは三回もやりなおしているのだと考えるのは困難だろう。むしろその魂不死の証明は不完全にしか出来ないことは明らかなのではないだろうか。不完全なのは覚悟の上で、何度も繰り返すべきものだからなされている、と推測できるだろう。というのは実際、プラトンは③の証明の後、ソクラテスに次のように語らせ、証明を切り上げるソクラテス自身がその証明が不完全であることを見透かしているというように描いているのである。

「実際、実に、まだたくさんの疑問反論の余地はある、もし少なくとも実に誰かがそれらを充分にすっかり調べあげようとするならね（『パイドン』八四C六〜八）」

## 2 自分の為に必要な言論嫌いの戒め

また、③の証明に対するシミアスとケベスの反論を聞いたあとで、ソクラテスはパイドンの髪をなで、「言論嫌いへの戒め」を語る。

言論嫌いとは、ある人間をすっかり信用して裏切られるというようなことが続くこと、万人を憎むようになる人間嫌いと同じようなものである。人間嫌いに陥る人は人間のことがよく分かっていないのだとソクラテスは語

る。極端によい人とか極端に悪い人というのは両方とも少なく、最も多いのはその中間の人々なのだ。あるときには真、あるときには嘘だと思えるような言論にたくさん出会ったからといって、言論を憎んではいけない。混乱の原因は言論ではなく、自分にあるとしなければならぬのである。

またこの戒めをソクラテスは自分の為に必要だと言う。死にゆくソクラテスは死までの間、言論を嫌いにならざるにしなければならぬのである。というのは自分がその言論に納得をしたいからで、ソクラテスは議論でシミアスやケベスに勝とうとしているのではない。あくまでも自分自身が納得のいく言論を得たいのである。

「実際私は、私の言っていることが真実であると周りの人々に思ってもらおうと努力しているのではなく、まあそういうことがあつたつていいのだけれど、そうではなくて、そのようであると思わせようと努力しているのは、実にとりわけこの私自身に、なのだ（『パイドン』九一A七〜B一）」

このことはあくまでもソクラテスにとつてはすべての言論がソクラテスにとつてのものであるという自覚をあらわしている。「まあそういうことがあつたつていい」との文言は、本当に周りの人びとがどう思おうと関係ないことを示している。ソクラテスはあくまでも自分が納得すればいいのである。続けてソクラテスは、ある計算が自分にはあると言う。その計算とは、もし魂の不死という主張が当たつていればそれはそれでよいのであるし、当たつていなかつたとしても死んで魂も残らないのだとしたら、死んだあとは何もないのだから、死ぬまでの間の短い時間、納得出来ていられてよかつたということになるだろう、というものである。

この計算があるということは、それだけで、ソクラテスは魂の不死を完全に確信してはいないということにもなるだろう。

3 ④の証明の成否はどうとらえられているのか

では、④の証明、所謂「魂不死の最終証明」に話題を移そう。果してこの最終証明も、「魅惑の歌」の一つだと言えるのだろうか。それとも、これだけは、完全な証明なのだろうか。

しかし、となると問題はその証明の本身ではない。その最終証明の成否を対話者たちが、結局のところどのようにとらえているかである。その証明に対して、議論にうるさい人物として描かれているはずのケベスは、

「少なくとも私としましてはソクラテス、と彼は言いました、それらについて何か他のことを言うことは出来ませんし、それらの論を信じないことも決して出来はしません（『パイドン』一〇七A二―三）」

と言って納得してしまう。だが、議論にケベスほどはうるさくないはずのシミアスが抵抗し、また証明を語った本人であるソクラテスもそれに同意をしようのである。

「とはいえです、とシミアスは言いました、私自身実に語られたものどものどこにも不審を抱く余地はありません。しかしながら、議論をしてきたことどもの重大さから、そして人間の無力さを不名誉に感じるが故に、なお、語られたことどもについて、自分自身のもとに不審を抱くことを私は強いられてしまうのです。」

このことだけではないのだ、シミアスよ、とソクラテスはおっしゃいました、きみの言っていることはあの最初の諸々の前提にも当てはまるのだ。さらにもし、それらがきみたちに信じられるものであったとしても、それでもなお、より明確に考察されなくてはならないのだ。そしてそれらの前提をきみたちが充分に分析した

ならば、私が思うには、きみたちは人間にとつて従うことが可能な限り、出来るだけその論に従うことだろう。そしてこのことそのものが明らかになれば、きみたちはそれ以上探求していかないだろう（『パイドン』一〇七八〜B九）

ここに、ソクラテスがその最終証明をどう見ていたかがうかがえる。最終証明は「あの最初の諸々の前提」についてもっと考察されなければいけないものだとしてソクラテスは言っている。証明の前提が、まだ考察すべきものであるとするなら、その前提の考察が証明の成否を握っていることになる。ただソクラテスは、それ以上はシミアスとケベスにゆだねるわけなのだが、その部分は、典型的な *more vivid future* のセンテンスで語られているのである。ソクラテスはこの最終証明を、ここまでだけでは完全だとは言えないが、その証明が完全なものになる可能性を否定はしていない。しかしそれはあくまでも可能性でしかないのだろう。

#### 4 魅惑の歌としてのミュートス

その後、ソクラテスは死後の世界のミュートスを語る。何故プラトンは証明のあと、最期にソクラテスにミュートスを語らせたのか。まず、その内容は要約すると次のようなものである。

肉体の死後、不死である魂は、ハデスに行くことになるがそこに持っているのは教養とこれまで培ってきた性格だけである。それぞれの魂には生前からその人の係となっていたダイモンがある場所へ連れて行く。そこで魂は裁きを受け、ダイモンとともにハデスを旅しながらこうむるべきことをこうむ



り、一定期間滞在し、再びこの世に立ち戻る。また大地は球形で真中に位置し、私たちはその表面のあ  
るくぼみに住んでいる。その上には美しい真の大地が広がる。私たちが住んでいるところよりも下方に  
は、タルタロスを中心に四つの大きく恐ろしく暗い河の流れる地下世界が広がる。死者たちの魂はそこ  
で裁きを受け、生前悪いことをした者には刑罰が与えられ、河に流されたりする。よいことをした者に  
は恩賞があるが、とりわけ敬虔に生を送った者は、地下世界から解放されて上方へと上り、真の大地に  
住む。そしてまたその中でも哲学で充分に自己を清めた者はさらなるもつと美しいところの住人となる。

これは、死後の裁きと報酬の話であると言ってしまったてよいだろう。哲学に努め、よく生きた者には死後よい  
ことがあり、悪く生きた者には死後苦しみがある。だから私たちはよく生きなければいけない。プラトンはソク  
ラテスにそのように語らせている。

正直なところ、今まで論理的に語っていたソクラテスを見てきた読者にとってはこれほど馬鹿げた話はないだ  
ろう。これは、古くからの言い伝えやおとぎ話をソクラテスがまとめているだけのようなものでしかない。しか  
し、ソクラテスは次のように言う。

「ともあれ、それらが私が詳しく語ったようであると断言することは知性を持っている人にはふさわしいこ  
とではない。とはいえ、実に魂は不死であると明らかである以上は、私たちの魂とその住処についてのことど  
もがそうであつたりそのようであつたりするのだとすることは、思うに、適切で、そのようにあると考えてい  
る人にとっては危険を冒す価値のあることなのだ——何故ならその危険は美しいから——、そして、そのよう  
なこともを、正に自分自身に魅惑の歌を歌うようにしなければならぬ、実にそれ故、私はさつきから長々

とこのミュートスを話しているのだ(『パイドン』一一四D一〜八)

このミュートスも、「魅惑の歌を歌う(*engōsuru*)」という語が七七E九と共通しているように、そこで語られている「魅惑の歌」だということになる。このミュートスも、「魅惑の歌」であるという点では、先の四つの証明と変わらないものである(三)。

## 5 「証明」という語

そもそも、『パイドン』を語る上で研究者たちが語る「証明」という語、これは『パイドン』のテキストのなかでどのように出てきているのだろうか。そのためには①〜④の証明が出てくる直前の部分を見て、それらが何として要請されているのか、をまずはふまえなければならぬだろう。それはケベスの科白にある。

「とはいえ、もしおそらく、魂が魂単体で存在し、今さっきあなたが詳しく語ってくれたいろいろな悪いことどもから遠くはなれているとしたら、あなたの語っていることが真実であるという大いなる美しい希望があるということになるでしょう。しかし実際、おそらくそれには、人間が死んでも何らかの力と知を持っているのだという少なからぬ *napaivōtias* と *noizis* が必要ですよ(『パイドン』七〇B二〜四)」

以降のソクラテスの所謂「証明」(おそらくミュートスも入るだろう)は、「少なからぬ、*napaivōtias* と *noizis*」と表現されているところに注目したい(四)。松永は、「少なからぬちからづけとそれを保証する議論(五)」

11 プラトンは「魅惑の歌」を歌っているか？

と、岩田は、「少なからぬ説得と証明<sup>(六)</sup>」と和訳している。また、ホーラーは「no little argument and proof<sup>(七)</sup>」ブリックは「a good deal of convincing reassurance<sup>(八)</sup>」キャロップは「no little reassuring and convincing<sup>(九)</sup>」ハットンフォースは「a great deal of persuasive argument<sup>(一〇)</sup>」と英訳している。マーチャーII はインダは「reassurance<sup>(一一)</sup>」バーネットは「persuasion<sup>(一二)</sup>」<sup>reassurance</sup>と「proof, not belief<sup>(一三)</sup>」<sup>persuasion</sup>は here of what produces conviction: ‘proof, argument<sup>(一四)</sup>」と注を付け説明している。ちなみに、フィチーノの羅訳では「*napayvbiaç* は *persuasio* に、*nistis* は、そのまま *fides* になっている<sup>(一五)</sup>。

注目すべきはこの *nistis* を多くの解釈者が、所謂「信」というようにそのまま理解することはしていないということである。確かに語彙的にも文脈的にも「証明」や「proof」といった訳語をつけたくなるのかもしれないが、しかし、そのように使う場所はプラトンの作品の中では他には皆無である<sup>(一六)</sup>。

なお、ここではこの箇所の適切な訳語を考えたいのではない。いや、むしろ、この *nistis* を「証明」と訳した方が目を引くことになるのかもしれないが、*napayvbiaç* (「励まし」や「元気づけ」もしくは「説得」)と一緒に語られていることに注目したいのである。ケベスがソクラテスに要請しているのは、先にも述べたように、やはり、証明という言葉で我々が通常想起するような、一度限りで命題に保証を与えるようなもの、根拠を明らかにし、その事柄が真実であることを明らかにすることというような普遍的な真理を指摘するようなものではなく、あくまでも主観的な、対人間の、「励まし」、「元気づけ」、「説得」というようなものだということから分かる。故に、*nistis* という言葉が使われる。ケベスは単なる説明ではなく、ソクラテスの「保証」、ソクラテスがそれで実際に信じ納得している説明が欲しいのである<sup>(一七)</sup>。

## 6 「ミュートス」という語

次に、ミュートスである。実はミュートスという語は、『パイドン』のかなりはじめの方にも出て来ている。「夢のお告げ」の話の場面である。

ソクラテスは牢獄の中で、アイソポスの物語を詩に直したり、アポロン賛歌を作ったりしているが、それは何故なのかと、エウエノスに聞かれたケベスがソクラテスにそのことを尋ねる。ソクラテスはこう説明する。生涯にわたって、

「…文芸（ムーサイのわざ）をなし、仕事とせよ（『パイドン』六〇A六〜七）」

という「夢のお告げ」を受けてきた。ソクラテスは哲学こそその「文芸（ムーサイのわざ）」だと解してきたが、裁判が終わり死刑まで時間があるという巡り合わせを考えると、もしかしたら一般に「文芸（ムーサイのわざ）」と言われている詩作のことかもしれないと思えたので、それをしているわけである。

つまり「文芸（ムーサイのわざ）」が「哲学」であるというのはあくまでもソクラテスの解釈でしかないのだ。人間並みの知恵しか持たないソクラテスの解釈である。故に可能性としてある他の解釈もやっておくべきだとソクラテスは考えたわけだ。そこでまずアポロンにむけた賛歌を作った。ソクラテスはこう語る。

「しかし、神の賛歌を作ったあとで私は思った、詩人は、いやしくも詩人であろうとするならば、ミュートスを作らなければならないのだ、ロゴスではなく…（『パイドン』六一B三〜五）」

この後ソクラテスは自分はミュートスを作る作家ではないから、手近にあったアイソポスの物語を詩に直したと言っている。

ここで不思議なことは、だとしたらアポロンにむけた賛歌はロゴスということになるのである。一体ロゴスとミュートスの区別を、その言葉の上では、プラトンはどう解しているのだろうか。

最新の研究では國方が次のように分析している。「ミュートスとロゴス、すなわち神話的な表象に基づく物語と厳密な論理の上に構築された議論との峻別は、プラトンにおいてはじめて明確に現れてくる、と我々は先に述べた。もつともこの峻別はその言葉における使用とは必ずしもうまく対応していないことにも注意する必要がある(二〇)」、「このようにプラトンにおいても、ミュートスは神話、物語、あるいは作り話、ロゴスは論理、問答法的な議論、というように、言葉の上で明確に区別されているわけではない。つまり、このような区別は学者たちが便宜的につくり出したものでしかないのである(二一)」。

國方も概念上の峻別と言葉の使用を全く別とするわけでは勿論ないのだが、「必ずしもうまく対応していない」のは、確かにいまのアポロンにむけた賛歌の場合でも明らかであろう(二二)。

## 7 美しい危険

というわけで、『パイドン』におけるソクラテスが語る「魂不死の証明」は、どれも完全なものではなく、それは「魅惑の歌」として生きている間に何度も何度も繰り返し聴かなければならないものであった。また、ミュートスも「魅惑の歌」となりうる。そもそも「証明」もミュートスもあまり区別はないのかもしれないのである。とすると「魂の不死」は本当かどうかは分からないが、それを聞き、信じ、そういった希望を持つこと、そうやっ

て生き、そのような生き方を仲間にも勧め、ソクラテスをプラトンは描いていたことになる。とすれば、「魂の不死」という結論に関しては、それは「探求」の対象ではないことになる。それは結論がもう先に出ていて、それを如何に説得的に語るかという問題なのである(三三)。

次にその「魂の不死」を登場人物がどう受け止めているか。先の引用の箇所でも出てきているが、ケベスとソクラテスではその「魅惑の歌」の目的、「魂の不死」に関する姿勢が若干違う。同じそれを、ケベスは「希望」と語り、ソクラテスは「希望」とも言うが「危険」とも言っている。しかし、共通しているのは「美しい(立派な)」という形容がされることである。

どうして「美しい」と表現するのだろうか。「よい希望」「よい危険」とはどうして表現していないのか。

おそらくそれは、もし、「美しい」は「よい」よりも当時のその語の使用において多分に主観的・感性的であると言えるならば、先の「魂の不死」が「説得」や「納得」の対象であるということに理由を求めることが出来るだろう。

## 8 プラトンの立場

では、著者プラトンにとって、その危険は美しかったのかどうか。『パイドン』という作品それ自体が「魅惑の歌」となっているという想定をすれば、プラトンの意図は「魅惑の歌」である『パイドン』という作品を書いたということから読み取れるはずである。プラトンもまた、『パイドン』を書くことで「魅惑の歌」を唱え、「魂の不死」を自身に説得していたと考えられるかもしれないからである。本当にそうだとすると、プラトンは作中のソクラテスのそのような生き方、つまり「魅惑の歌」を唱え「魂の不死」を自身に信じさせていく生き方、に同

意をできていたということになるのだが、果たして本当にそうなるのかどうか。というのは、ひとつは作中におけるプラトンの不在である。『ソクラテスの弁明』のようにその場に来ていたというように描いてもよかったのだ。どうして病気で来ていないというように距離を置くのか三三三。もうひとつは、語り手であるパイドンが語っているというその設定である。『パイドン』は、アテナイからはなれたプレイウスの港で、パイドンという人物がその思い出を語るという形式をとっている。

ここで指摘したいのはその舞台設定の妙やパイドンという歴史上の人物を持ってきてのプラトンの登場人物設定の緻密さではない。それらからの解釈も無論有意義ではあるが、ここではまずこの『パイドン』のテクストから読み取れることのみから考えたい。それは、当たり前のことではあるが、プラトンが自身を消し、プラトン自身では決していないパイドンが語っているということである。そのパイドンにプラトンはこのように言わせしめている。

「少なくとも私は、おそばにいて驚きを隠せませんでした。というのは、私は親しい人の死に立ち会っているのに、惻れみの気持ちがわかかなかつたのです。実際私にはあのお方が幸せに見えたのですよ、エケクラテス。その様子からお言葉からも。安心して高貴に死んでいかれたのです。だから私は思ったのです、あのお方はハデスに行かれるわけだが、神の恩恵なしには決して行くことはなく、あちらに到着しても、いやしくも今ままで他の誰かがそうだったならば、幸せにすごされるだろうと（『パイドン』五八E―五九A）」

パイドンはそのとき、不思議と悲しくはなく、ソクラテスには神の恩恵があつて幸せなのだと思えたということと言っている。このことはパイドンがソクラテスの死を極めて肯定的に捉えていることを示している。そのパ

イドンを通して自分プラトンは描いているのだ、ということを書いたプラトンは冒頭で示しているのである。

だとすれば、そう簡単にプラトンの意図は読み取れないだろう。『パイドン』で描かれているソクラテスの最期はパイドンの語ったことなのだ。読み取れるのは、予想にすぎないのかもしれないが、あくまでも、プラトンはパイドンではないということ、つまり「自分プラトンはソクラテスの信奉者である」とは示していないということだけではなからうか。ともあれこれで、作中のソクラテスがプラトンの代弁者であるということは、『パイドン』中の何処であつても、はっきりとは言えなくなつたと思われる。そう主張するためには、このパイドンの主観性について、もつとうまい説明をしなくてはならない。ソクラテスはテオフィルとは違ふのである。

ただし、こういった作中のソクラテスとプラトンを切り離す主張には、『パイドン』でのソクラテスが歴史的ソクラテスのようなものでプラトンと切り離せるだろうという含みは一切入っていない。そのようなことは『パイドン』をいくら分析しても出て来はしないだろう。おそらく、『パイドン』は丸々ひとつプラトンの作品で、すべてがプラトンの書いたものなのだから。プラトンの作品中のソクラテスは総じて、プラトンの作品中の登場人物としてのソクラテスである。そのことなら、プラトンの作品の作者がプラトンであるというのが事実ならば言えるのである。

### おわりに

『パイドン』は、語り手パイドンの次のような言葉で結ばれている。

「これが、エケクラテスさん、私たちにとつて友に値する人であり、私たちが主張出来る限りにおいては、その



当時の人々のうちで私たちが接してみても知った人物の中では、最もよく、加えて最も賢く、最も正しかったお方の最期だったのです（『パイドン』一一八A一五〜一七）

ソクラテスの信奉者であるかのように描かれているパイドンにも、プラトンはそのようにして「主張出来る限りにおいては」だの、「その当時の人々のうちで私たちが接してみても知った人物の中では」だのと、留保を入れさしめている。

とするとそこには、「ソクラテスはこんなものでしたが、みなさんはさらに探求を続けて下さい」という要求もあるのかもしれない。プラトンが提示しているものは何らかの体系や教説などではないのである。もちろん参考には出来るが、そのまま受け入れてどうなるものでもない<sup>(三三)</sup>。

よって、プラトンが哲学者たるもの、読者に本当に要求していたことは、ソクラテスの学徒になり、ソクラテスの行動を真似ることでも、プラトンの著作を読み、プラトンの学徒になることでもなく、そこから自分で新たにはじめることなどではないだろうか。プラトンの矢はそのことを示すために残っている。だから我々がどのように彼のテキストを読もうともハイネのように嘆かないかもしれない。いや、そのテキストに拘泥していることをやはり嘆くだろうか。それにしてもプラトンはいろいろな面白い本を書き、拘泥して調べたくなくなるような一筋縄では分かりにくい、それでいて魅惑的な美しい言説をソクラテスに語らせている気はするけれども。

※底本としたテキストは、E. A. Duke, W. F. Hicken, W. S. M. Nicoll, D. B. Robinson et J. C. G. Strachan, *Platonis Opera*, I, Oxford Classical Texts, Oxford: Oxford University Press, 1995. ㄅㄆ。

## 〔註〕

- (一) e. g. J. Burnet, *Plato's Phaedo*, Oxford: Clarendon Press, 1911, p. 47.
- (二) cf. R. Hackforth, *Plato's Phaedo*, Cambridge: Cambridge University Press, 1955, p. 18.
- (三) そもそもこのコメントを、その前までの①〜④の「証明」と位相を異にして切り離す分け方にいかなる根拠があるのだろうか。そこを切り離したい論者は、文脈や内容から様々なことを言うだろう。しかし、同じようなことが、③の証明と④の証明の間にも言えはしないだろうか。
- (四) 『パイドン』内の他の場所で「証明」と訳され頻出するのは、*apodeixis* や *apodeixivhai* である。また、七〇D 二では *tekhneion* とどう語も見られる。
- (五) 田中美知太郎・藤沢令夫編、今林万里子・田中美知太郎・松永雄二訳、『プラトン全集』第一巻、岩波書店、一九七五年、一九五頁。
- (六) 岩田靖夫訳（プラトン著）『パイドン』、岩波文庫、岩波書店、一九九八年、四四頁。
- (七) H. N. Fowler, *Plato*, I, Loeb Classical Library 36, Cambridge: Massachusetts: Harvard University Press, 1914, p. 243.
- (八) R. S. Bluck, *Plato's Phaedo*, London: Routledge, 1955, p. 58.
- (九) D. Gallop, *Plato, Phaedo*, Oxford: Clarendon Press, 1975, p. 15.
- (一〇) Hackforth, op. cit., p. 58.
- (一一) R. D. Archer-Hind, *The Phaedo of Plato*, London: Macmillan, 1883, p. 71.
- (一二) Burnet, op. cit., p. 46.

- (一三) loc. cit.
- (一四) C. J. Rowe, *Plato Paedro*, Cambridge (U. K.); New York: Cambridge University Press, 1993, p. 153.
- (一五) cf. M. Ficino, *Divini Platonis Opera Omnia*, Francofurti: Apud Claudium Marnium, & haeredes Ioannis Aubrii, 1602, 53B.
- (一六) ただし、一箇所だけ、『パイドロス』二五六Dでは、「保証」「担保」というような意味で使われているととれる。
- (一七) とすると、訳語としては、ハックフォースの a great deal of persuasive argument が適切であろうか。またハックフォースはそのあとのソクラテスの科白に、*diatriboloyein* という動詞が使われている点に適切にも注目しているが、結局特別な意味はないとしてしまっている (Hackforth, pp.58~59)。
- (一八) 國方栄二、「プラトンの「ミュートス」」、京都大学学術出版会、二〇〇七年、一〇七頁。
- (一九) 同上、一〇九頁。
- (二〇) 國方は、そのように言葉の使用に関して区別が曖昧であるということを明らかにした後で、プラトンの「ミュートス」概念を整理し、ロゴスと補充しあうものであるというように結論付けている。
- (二一) つまり、結論ではなく、その証明、励ましの過程が探求の対象なのである。
- (二二) 「本当に病気だったから」という可能性もあるが検証不可能である。
- (二三) また、作中のソクラテスも、周りの人々に自分の魂不死の証明を信じると、まるで宗教の教祖のように語るわけでは決してない。七八Aで魅惑の歌は「探求」とも言い換えられており、ソクラテスの死後、思い出して唱えたり歌い手を求めたりするだけでなく、お互いの対話による「探求」の対象なのである。おそらく「魂不死の証明」は、神でない人間にとつては、どこまでも疑いうるものであったのだろう。しかし、その「証明」は実際のところ励ましであり、結論ありきのものであった。それが何故そうでなければならなかったのかは、非常に重要な点で

あるが、そのことはいずれ稿を改めて論じたい。この論での結論は、言い換えれば、そのような「証明」を語るソクラテス自体がプラトンにとつては探求の対象だったのであり、「師事」という言葉の意味にもよるが、少なくとも対話篇内で自ら描いたソクラテスは師事したり模倣したりする対象では決してなかったのだということが『パイドン』という作品のみから明らかになるといふことである。またそれは、ソクラテスとプラトンを区別することのできる可能性のひとつでもある。

**Summary of Kazuo KOJIMA's  
'Was Plato singing charms?'**

This article treats Plato's *Phaedo*. In *Phaedo*, Plato makes Socrates prove the immortality of the soul four times. But it is possible to read it from the text that all of the four proofs are imperfect and even the characters, Socrates and his inner circle of friends, also do not think that the proofs are perfect. Then, why are they the proofs? From consideration on 77d ff., it is understood that all of the four proofs are, judging from the viewpoint of role, must be on par with Mythos and they are only the charms. And the immortality of the soul is not the object of the inquiry, but the conclusion that has already been decided, and the hope which we have to bet on. Socrates in Plato's *Phaedo* thought about the immortality of the soul like that. Moreover, because Plato wrote the work *Phaedo*, Plato's intention might be able to be read from the assumption that the work *Phaedo* per se can be one of the charms. If we were able to think that Plato also, by writing the work *Phaedo*, was singing charms and trying to persuade the immortality of the soul to himself, we could think that Plato was able to be heartily agreement with such a way of life of Socrates in this work, such a way to live singing charms and trying to persuade the immortality of the soul to himself. But, based on the form that one of the characters Phaedo reports and the declaration of Plato's absence, we should guess better that Plato put distance between himself and such Socrates and Socrates itself was the object of the inquiry for Plato.